

## 平成 29 年度 第 7 回講演会 記録

日 時	平成 29 年 7 月 8 日 (土) 13:00~16:00
会 場	此花会館 梅香殿
講 師	鳥取県漁業協同組合 本所 漁政指導課・福部支所長 古田晋平 先生
演 題	鹿野に暮らし鳥取の海を生かす
備 考	参加者数 171 名 (会員 150 名、一般 18 名、聴講 3 名) 記録 飯田 正恒

はじめに

古田さんは鳥取県庁で長年水産行政に従事し、栽培漁業技術の向上・確立に取り組み、水産技術の向上に貢献されてきました。退職後は漁師になることを夢見ておられたが、周りから請われて、現在は、新設された鳥取県漁業組合指導部で「未利用海藻の商品化」や「海女の復活」等に取り組み鳥取の漁業、沿岸漁民が漁で生きていける道の開発に尽力されています。

25 年前に鳥取市内から鹿野町に移り住み、小さな城下町での老住民に溶け込んで、生活を楽しんでおられます。(田中 克)



—講演要旨—

1. 私の暮らす町「鹿野町」

戦国大名・亀井茲矩は鹿野城主としての治世は 30 余年であったが、殖産興業におおいに励み、また無学な大名の多かった当時、奇跡的教養人というべき人物(司馬遼太郎・街道を行く 27)で、経済・文化両面でよい政治をして領民からおおいに慕われた。現在も「かめいさん」と呼ばれ祭りや踊りに、また町の人びとの生活規範として生き続けている。その鹿野の町の四季の景観、鹿野祭りのこと、町の人びととの交流や日常生活の実感を語っていただいた。

2. 鳥取の海に生きる

(1) 私と栽培漁業

1) 平成 15 年度、鳥取県栽培漁業センター長に就任し、栽培漁業の持続可能な高水準漁獲の実現を目指し活動を開始した。栽培漁業センターで生産技術を開発してきた魚介類は、ヒラメ、アワビ、サザエ、バイ、アユ、イワガキ、ワカメ、アラメ、キジハタ、マサバ、アユカケ、クロメなどである。

2) 栽培漁業技術の体系には「種苗生産技術」と「種苗放流技術」がある。前者は飼育環境、飼料、疾病、種苗の質、大量生産、省力、省コスト、施設設計などを研究・開発して事業化する。

後者は、資源・生態調査(分布、移動、成長、飼料生物)の結果から放流技術の向上を目指す。放流実験により、適地、適期、適サイズ、適法を調査する。放流後は効果(放流魚回収率・金額・収益性)を調査する。

3) 放流技術開発実践例として「ヒラメ」の場合

① 放流稚魚は放流後約 1 週間で、放流海域のヒラメ 1, 2 才魚、マゴチに捕食され全滅を確認。一方、天然稚魚はほとんど食われないことから、天然稚魚と人工稚魚の摂食時の離底時間、遊泳コースを調査しその行動パターンの比較から、人工稚魚は放流後 1 週間くらい補食されやすい行動をすることが分かった。

- ② 従来は 6～7月に稚魚放流を実施していたが、この時期は主食となるアミ類の分布が少なく、摂餌率低く被食率が高い。しかし、アミ類の多い 4～5月に放流すると 6月には全長 10cm 以上になる大型稚魚に成長し、沖合に拡散し漁獲量の向上につながる事が分かり、放流時期を 4～5月に変更した。その結果、市場に水揚げされる回収率は稚魚放流時期 6～7月の場合 1～2%であったが、4～5月では 5%に上昇した。(従来は放流ではなく、ヒラメ 1, 2才魚、マゴチへの撒餌であった)

#### 4) クロアワビの場合

- 稚貝は海面に撒くだけではタイ、ヒトデ、タコなどの撒餌になってしまう。面倒でもアワビの好きな場所を見つけて稚貝を置いてやる必要がある。このようなことを漁師に指導するのもセンターの仕事である。
- 1992-2014年のアワビ類漁獲高を鳥取県と全国平均を比較すると、全国では漸減し続けているが、鳥取県では放流方法の見直し後明らか増加し、淀江地区では回収率 30%にもなり経済効果は大きい。

#### 5) 放流に頼らない豊かな海づくり

##### ① イワガキ

イワガキが着生する天然岩礁についているフジツボなどを除去してイワガキ幼生が着生し易い環境を人手で造成している。鳥取県のイワガキは売り上げ年商 1 億円にもなる重要な商品。

鳥取県の漁協では、平成 17 年より岩ガキのブランド化に取り組み、県内で採取された”天然岩ガキ”に『夏輝』(なつき)というブランド名をつけて販売している。また、その中でも下殻が平らで全体的に外観が平べったい”ヒラガキ”で、殻長が 13cm 以上ある高品質のものに、ブランドラベルをつける取り組みを行っている。このラベル付き岩ガキは、水揚げされるカキの内、わずか 1 割程度しかなく希少価値が高く、夏輝ブランドの主演といえる。

##### □ 豊かな磯場漁場を維持する藻場づくり

藻場の役割は魚介類の産卵場、稚魚の保育場、餌、餌生物提供、水質浄化、CO<sub>2</sub> 吸収、酸素放出など多岐にわたり、豊かな海であるために必須のハビタット(生息場)である。鳥取県には分布していなかった「アラメ」で藻場をつくる計画をたて、県内 10 数カ所に移植し藻場の形成過程を観察した。その結果 14 個所で藻場の拡大が確認されている。

- 6) 第 31 回全国豊かな海づくり大会(平成 23 年 10 月)において、鳥取港で天皇皇后両陛下に鳥取県の栽培漁業を説明する機会に恵まれ、貴重で名誉な体験であった。

#### (2) 海の葉っぱビジネスで限界漁村よ、甦れ

鳥取県の沿岸漁業の現状をみると、漁業事業者は、平成 5 年から 25 年までの 20 年間で 1978 人から 1320 人と 2/3 に減少。年令構成も高く、40 才以下が極めて少ない。このような中で託されたミッションは「漁師がもうかり、漁協が潤うしかけづくり」であった。このような状況で着目したのは、未利用資源の活用である。

##### □ アカモクの商品化

無尽蔵にあるアカモク(ホンダワラ科の一年生海藻)には食物繊維(フコイダン)や色素(フコキサンチン)が極めて豊富で、カルシウムなどのミネラル分も豊富に含まれ、健康食品として注目されている。健康海藻として、対面販売、NHK 鳥取放送局の特集番組放映、新聞報道などで知名度 UP

を図った結果、売り上げは 2015 年約 500k g から 2016 年 3 トンになり、2017 年は 6 トンの予約がある。漁業者の新たな収入源になり、今後の収益拡大も期待できる。今後、全国的知名度の向上やさらなる商品開発努力をする必要がある。

②「神馬藻」(ホンダワラ) は料亭の大阪吉兆が食材に採用しており、今後の成長を期待している。

(3) 新天地で海女として生きる

- 1) 鳥取県夏泊港には、400 年前に亀井公が九州から連れてきた海女が活躍を続けてきた歴史がある。しかし、近年高齢化で廃業し鳥取県に海女はいなくなった。
- 2) 平井鳥取県知事の海女復活の希望を聞き入れ、海女を公募したところ 3 名の応募があった。現在 2 名が岩戸漁港で研修を受けている。
- 3) 海女ブランドを生かした商品開発や販路開拓を行い、新たな漁業収入を求める活動を展開中。

(4) 残された時間に、つぎのことに挑戦して行きます。

- 1) 漁獲物の付加価値創出 (漁師だからできる高鮮度処理商品の開拓)
- 2) 未利用資源の掘り起こし (まだまだある、本当は売れる水産物)
- 3) 付加価値づくり体制の構築
- 4) 漁業後継者づくり
- 5) 行政・試験研究機関との連携体制づくり (栽培漁業センター、県庁などとのつなぎ役)

ご静聴ありがとうございました。

【田中克先生のご感想】

栽培漁業センターで育てた稚魚が、放流後 1 週間で全滅する原因を、海に潜って丹念にその行方を追いかけて、また魚の行動パターンを調査するなど徹底した現場分析の結果、放流時期を 2 ヶ月早めることで回収率を大幅に高めることに成功された事例は、古田さんらしい緻密な思考と類希な行動力の生んだ成果として、画期的なものであると改めて認識させられました。また、鳥取の海を豊かにして漁師も漁協も儲けようとの使命にもとづく、独自のアイデア満載の種々の取り組みもとても興味深いものでした。

現場主義、現場から思い浮かべるアイデア、思いついたアイデアの即検証と云う現役時代から、現在は、さらに今にも崩壊寸前の小さな漁村が生きていける具体的な道を示すなど、今全国的に問われている地方再生の「最先端」におられ、実行力に改めて感動しました。

古田さんは中国地方で最も高い大山 (1729m) の頂上から日本海へ飛び降りた、鳥取県で初めてのハングライダーであり、また特技の潜水を生かして何名もの人名救助をされた稀有な人物でもあります。これからの活躍に一層の期待をしています。

以上